1998. 1. 30

(Japanese Academy of Learning Disabilities)

日本LD学会会報 第23号

事務局：東京学芸大学心理学研究室内　〒184 東京都小金井市貫井北町4-1-1
TEL&FAX. 0423-27-2890

知・情・意のバランス
－ライフサイクルの視点より－

札幌医科大学保健医療学部教授
佐　藤　　剛

第６回目を迎えたＬＤ学会のプログラムや演題発表は教育関係者の関心が年々高まってきているのを感じるとともに、一方ではＬＤにあった「学習計画・指導」を追求するあまり何か抜けているのではないかと不安に襲われることがある。それは教育（小・中学校）という限られた時間・空間のなかで、そして「指導」というある意味ではプログラム化された環境のなかで、ＬＤ児の一生涯（ライフサイクル）の視点がややもすると見失うことへの不安である。つまり、子供たちには年齢に応じた発達課題があるにしても、今していることが将来にどう影響していくかの視点を無くして、その場で「できる」ようになることを直接的な目的としていることの恐れである。

我が国の誇れる脳研究者である伊藤正男氏は、学習と脳との関係で「知・情・意」が一体となって真の学習が起こることを力説している。小脳機能の研究を通して、大脳皮質で知的に学習されたことが本人の「身になる」には情・意が係った経験・訓練が大切であるというのである。つまり、それらの知識は子どもの遊びにみられるように、全身の感覚情報を通して能動的に、そして快適に「もっとやってみたいなー」という気持ちで経験したときに、はじめて一生涯生かされるものとして脳に記憶される。小脳はそのための重要な役割を演じているというのである。

この知・情・意は、教育界では別に目新しいことではない。しかし、学校現場でのＬＤ教育において指導計画の短期達成に急ぐ余り、情・意をなおざりにしてしまう危険性を常に念頭において欲しいものである。先日第６回大会で特別講演したHayes博士は懇親会席上の雑談のなかで、言語学習訓練に関する縦断的研究で興味ある結果があることを指摘した。指導・訓練の仕方によっては、将来の実生活のなかで役立たないことがあるというのである。

机上の学習は、ややもすると本人の努力を強いる「知」のみの学習に陥りやすい。情・意を重んじる「遊び」の導入は、ライフサイクルの視点からの効果的学習になることを強調したい。